陳忠
孟傳

和氏璧

全

へ 13
2910
4 止

千代の鶯序

今にしまきて遥世を新しく見ぬ世の人を寿
すまるる史生の休しつあるべき僕年頃稽
古の牧子の第子を編つるも
くるを一時の戯れ遊ぶ春の日ぶりを
仮ざ秋の夜居眠を覚さんまでの序

門へ13
2910
巻4
昭和九年
七月六日購

なるふ[illegible]の遠[illegible]代の[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]

齊[illegible]生[illegible]平の[illegible]あ[illegible]

の[illegible]の[illegible]成[illegible]実[illegible]

け[illegible]佳ふ[illegible]も[illegible]人

[illegible]ふ[illegible]の[illegible]一口[illegible]

ふ[illegible]の[illegible]の[illegible]

表[illegible]の[illegible]端の[illegible]牧[illegible]のうちふ

述[illegible]傳[illegible]生[illegible]全[illegible]果[illegible]

[illegible]よ[illegible]あり[illegible]結[illegible]

[illegible]の[illegible]合[illegible]

本武[illegible]士

為永春水誌

妖婦
笹蟹

弾正が幼名弁之助
とゝろき妖婦と圍
碁の勝負と爭ふを
後輯ゆ〻し〜
仁木の弁之助

奥女中
沖の井

侍女
末葉

名木一隻履誰
知竈下烟

豆腐通

丁雅
豆太
豆腐屋の佐夫

三浦屋内唄者　染吉

音川修理進勝元

山名入道宗全

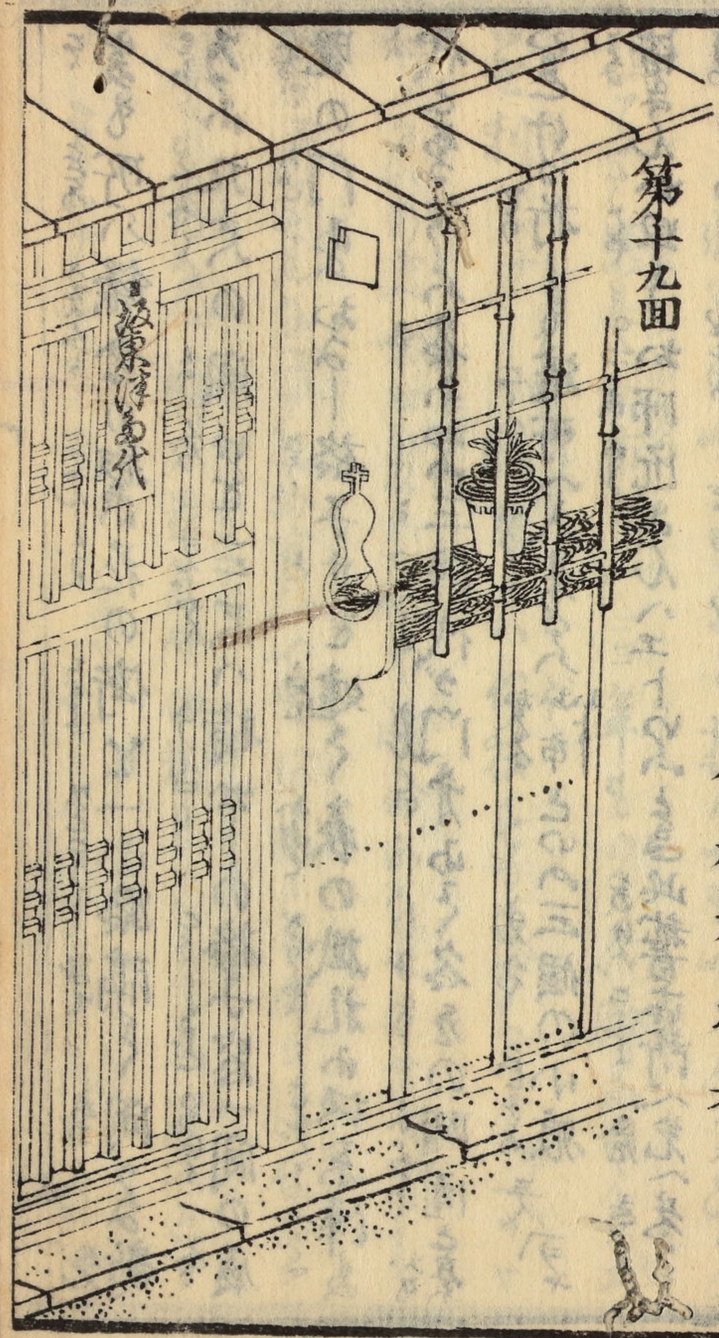
誠忠列傳
合読講釈

珍説千代碩四輯巻之上

江戸

為永春水著

第十九回



家も所ハ鎌倉の繁花の街を一小路構へ開る新
屋ハ九尺の間口を三尺ハ指出しの格子窓一間の廣
縁の門ハ大ハ格子戸を建て表の撫札ハ坂東津々
代と有る門ハ名ハ三津代が門井ハ名ハ師匠豪
屋けるハ折しも這所へ入来るハ市とのの三個の小娘三人ヲヤ
皆さん御早う。お師匠さんハエトハ此稽古所へ先へ来て
待て居る娘どもハ六人ひまヲヤ えんなぐお掛ひぐ
お早い子お師匠さんハ今ぐ湯へ行さッサ るアイウお久
さん 芝居のも同じ事ハ久 書へぐ繁りごと市ヲヤ買人ヲエ
史ぐヤア情男の吐しを為ぐ掛んぐ此り人がまいるヲ
ヲヤアレヤア 黒さお市さんゴヨ年もいろいろ癖ハ有ん人を大
ぐを利てサ へ情男と分ハ拵るのごらう 市ヲヤ
知らないのハ女が男ハ惚て情合ハ有るのサ る市
風る子エ そんなぐを お言ひぐも分ハ拵るのぐ情合ぐ
知らるもあるハ癖ハ草色や 御戸の名ハ遠ハどサ
市ヲヤ当り 森サ ヲヤ 雅ぐ有るのを

お見の市へ行く見る一ハヤ誰ご正然う言つてお吹
せの市へ行二誰でも宜人サ「アレ」高地が悪いこと
実正ホ然うお言ひと言ハバサ「ん」ホ言つてもお言ぐ
ふいと流人が相決しておお茶一個お友達の中を除
連ヨ家へ実正ホ然うサ此他ホ誰見も吹人ハふい
ふ吹しても宜ひじやアふいふ人市へ支じやア言ふふ
誰ホも言ふちやア居ごヨ行へ言ハふふ迷く
お吹し市へアノホ此ふ私が一個に住居ホ居ふふ子

向裏の高ぽんが来ふ公ハ何如人誰ふことお言ひご
ふふお店ふふ呼びホ来て誰ふヨとふふと支じやア美腰
ごふふ横町の俳諧の先生の所へ是を持つて誰で
裏の出来るのを待つて取つて来く呉んなそのうち
氏身が留守をしてふるふふト言つて俳諧の本を
見てもふふ物と外ホお茂を出し呉まく是で何でも
欲い物を実ひなトお言ひごふふ支を持つて表へ出ると
お濃のお房さんが私の住居へとそくと這入ふふ

何ごとかあらしいと思つて板戸をしゝく門口の障子の
穴から覗いて見ると宅の居アなるをしてどんなふ
可笑からうまるヘヨヤ居アなるを兵公をしこのごと
市ヘアレサ宅うそんみあやア可笑んぷて言ふものを
まゝくへ〳〵〳〵〳〵〳〵と代と中仕切の障子のなかに
新浄瑠璃の書板を写しく居る廿一二の艶男
堪へうねてフツト吹出し男へどもお市さんの此〳〵
あハ恐入りますものご者公もとんご穴を見付られて毋つサ

〳〵〳〵と笑ひながら遠方へ顔を出をお市ヘヨヤ宅さんが郡方ふ
お在の久私きやア居ごゑ誰とも関く人ハるいさんごと
宅人が言つておんなをいハせくうふいけるのねと
恥しい顔を赤くふ言ふハ宅ふ小娘の情ふんゝ「アレサ
私居ごゑどふしく知つて居るものゝねよう「ア私も同
居ふ宅ものごものを宅さんがお在のるを知つてゐる
居ごゑるいハ子者ヘ私居るごゝて障子の蔭ふお在のご
うゝ知りやアしるのヨ全躰お市さんが情男の此〳〵を

ゐようと言ひごゝさのごとく詮術がなの子エ　女「アヽ
然うサ　こゝハ誰達の悪いのでもなのノサ　夫ハそうと
半さんがお在ゼ丁度よひとうど家へよんゼ落出を
しゝく笑つく関ふじやアないう　なる「アヽ　分率安子エ
サア半さん遠所へお出なさいヨ　ヨット主働ハんたいや
せん此身ハ出しをさせく跡ゼ笑ふと思うん　女「ア
マアなんな邪推をまハしゝお在ゼヨ　誰がお茶さんを
笑よ　ものみ。ヨウ半さん　なるへ実正ハお願ひごゝさ

アレサ関ふなりをしゝく贈ふしの魂茶も郷程御殺の
席へ安ハお出の癖うゝく出まり出しゝも置さきみ
出ごゝエ　市「半さんハ分時ゼもお隠のお房さん呼ざの
表町の角松の奉イさんの住居さんゼ住ちやア
変色の遠入ちと出しゝや分ゝをおなの癖ハ私をを
子供ごと思ちて面倒ゞちて　お在のゼヨ　「ゝく市さん
此身ア情合をさるのをお茶ハ見ちまと笑ハねゼ
ゝく「市ゝゝ市ゝゝ　半さん　お茶さんが出しををちち

若草や

あいとお市さんが又どんな変を言ひ出さうも知れませんヨ
なるべくそしく是ゞど安さうなのをお拵しやるへと亀人の
思ひが取付くも知れませんヨまへさ思ひが取つくと。イヤそ
ればアとんど怪族だなしどようてヨヤ姉ひ拵どやア居ごヨ
なるへさ昼日中とんなれも変物じや安のようお化のとこ
ぢも姉ひなんハなへさレサ今ハ姉くなるつても
晩ハ小用ハ行くこまさんぢハ思ひ出をとこのけるのようサ
なるへ実正ハお吉さんハ癪病ごろう裏じもおなると
悪いヨ市へ然うなん人が出なるの姉ひのごアま変へ
そんなら姉ひを止て面白い可笑いところへ人情の
なる拵しハおあるまいヨまへイヤとこハ情くお情しい
ちゝも注文ハなつて来さ変じやア拵しをする暫くハ家ハ
居るものが残らど此身の情女ハなるれ人どやア居ごが
義ハかうま変へヲヤあるアしるまきんごヨそんな変ハ私
笑ちんハかうなるいこ工変へ宜ひヨすると言つて意くお拵
さ世なれ人市へナアニなんるお変を言つてもおおきんハ

きんのすを覗ゐ絶しい貝人ざと平常蓋く
お在の癖ゐたやくきんのお嫁ゐあるくおもひ
るふゐ　ゑ「アレモウ　お市ざんハおんなすだろうと言ひ
まとゐゐけるい腰ゴョおぐ〳〵お在ト言ひ多ちちん
と敲く真然をまる折しも津多代ハ何時の間
ゐる裏口より帰り来り化粧をあく奥うゐ出るるう
て「ヲヤ何ざく大きうあぎ中る妻ざれ人ま「十二流
女が私ゐ物さんざうゐ各位ゐ腰拓げんくさサ

まく「ヲヤ空ゑどるゐまたヨ私等が此しをるきびと言へバ
種くゐるを言ひて来きんがからくいけません「
市〳〵何板〳〵来きんゐヤ私が嫁く居るう流女
ゐ物をきせるんヨ　まく「ヲヤお師匠さんがおんな
戯言を市〳〵　て「支ハきうと代る山沙法のゐて
鶴産代孫の山屋〳〵きの位拡言ハいよく北日ゐ極る
と言ふるざうう皆きんがその氣ぐ精をおゐ出しざる
ふうちやヤいけるんヨ　る「ラン　腰しんぼ工寝う何日五と

廿日だェ　寅「今日が十日だから又十なかり寝ない
ぢやア廿日　みやア寝るなら八子　亀「まアそれハ毎日がそれ
ならなけりやア子エ速く十日たゝり仕立人ハ宜ひ
けれども　てる「ほんにそんなことをお言ひでも稽古が出
来ないぢやア　お出きなハ日　寅「ナアニ是から一日もお休さ
ないで稽古をなされまし　てる「そりやア忘女が精を
お出しだから出来もおなさらうが衣裳や髪の
方がなかく　十日ばかりが間にやアなりますまいぢやア

ないヨ　なる「そこ衣装と云バ昨日お師匠さんが親御さ
禰宜の事をお母さんに然う言ひましたら明神様の
お祭のとき田舎娘で着るのが仕舞てありますけれ
ども皆さんが絞りなぞしやおしらんなさるからお対に
あつく誂けと言ひましたヨ　る「ヨヤそれぢやアさんま揃
つて宅に言ひ子エ早速衣装屋へ言ひ付ますと
帰つてから母さんに然う言つておくれヨ　サアノそん
なら稽古をなさく進めう子エ今日ハよしてお玉さんが

一番ごゝ子「ハイ」るゝ「そもじゃ葱賣の昨日の
とうを寛一遍躍ッて見せ今日はまゝ行ゝの相
形ふるお金さんやお喜加さんがおせゝるゝお春
さんとお吉さんが相形ふるうてお進げ。アノウ辞ゝ白
眼ゝ合の手うゝ洋猫踊ゝ稽るところが昨日のゝも
寛う空とあるゝゝ私がゝ見せゝ通りゝ踊ゝ
見トふうち花柳のお久も来りゝ是よりゝ
稽古あそうゝ

第九回

却ゝこの日も赤下刺稽古の小娘ハ皆戻りて物
ゝうゝ家の内るゝアノウお久お茶用が済ゝう
完刺然う言うる所へ性うてお呉まそして丁度
路の序ゝうゝ衣装屋へ寄りて十八日まゝゝ残
らゝ揃ふ中まゝ腰帯ハ昨日の注
文より又ひとつ誂まゝそして忠信の衣装ハ舞
刺のうちゝ切りまゝの浸刺まゝゝ持せゝ上まゝ

くら代附だろう附諸くお呉んうさいと言ふのゞヨ
久〳〵ハイ支じゃア一件の方も十八日までゐと言うて
金まゝ出ろう つて〳〵で支ぢも買ヨト氏うらお久ハ仕度を
あるく出ようるを つて〳〵アノ名波性ゞけゐ裏町の銭金へ
寄うて子ト言ひ ゆだうわ 変ゐくゆ 出ようと言ひ知て
来る 久〳〵ちゃり中 ゐいうませうう つて〳〵ゆん
まり大きくるい方ゞ買ひヨ久〳〵ハイそんうふ性く来り
まゝヨまさん也寛りとお 拵びうさいまゝト言ふ捨て

出てゆく 〳〵ドレ氏身も帰ろう 殿ども 喰ひやうう つて〳〵アレサ
まア買ひ子今朝金へ出三とだろうどけまども言うて
来ろうさのゞ来るうふ変ぐお 喰んうまとのヨ 〳〵ヨウそんな
ろうをあるまちゃア毫ゐ お氣の毒ゞ子エ つて〳〵ナア二
此ろゐ お屋敷うふ来ろうと切ゐゐゞけるうふ夫ゞけ言うて
来ゆうさノサ私も同拵ゐ 喰るうふマア お待うさいヨと
ちく新洋猫猫ハんゐ書 拔て お呉ゐまちうさのえ
〳〵ア書さけまども名筆ゞろう字の落さ所や 漢ゐ

ねゝ所がひるゝも初見や甘ん悪けるやアヽ又書亜
をうゝ漢心見くお異な甘へ〳〵ヒヽお茶ちんが
書くお異なきろこのうゝ大丈夫弓遠へ行りま
せんヨト言ひく本を開いく見なぐら〳〵ヨヤモウ寛ゆ
うく美しく宜くまノこんゆれ書きまをねゝ仮名まを附て
お異なきろうゝ色どやアヽ誰ゆも懐まんヨト言ちう
程ゆく財金とゆふ紬屋より馬持へ入る蒲焼を
持て来る〳〵サアまん今ゆいうちゆお喰んなまをヨ

ホンニお股の茶お些とだろうお炬をいけま甘へくうこ立
ま〳〵土私しやノきろたう出来ねゝうおんなくのサて〳〵
失でも気をつめて書物をおあるきろうゝ一口お喰ゆ
方が茶めうまんヨ私も今日ハ稽古が込ごので
気を苦ろこ甘へう奢心とろこ甘ごうゝ一口喰ふら
宜うらうト思ハ安うゝバト言ひうゝ蠅帳の中より
亲焼の粥徳利へ酒の遠入りしを取り出し鉄瓶へ
入る此ときま次郎ハ火鉢の向ふへ居て煙草を呑で

居る顔を津矣代ハつくづくと見て完ホ矣人さへ
ヨヤ何を矣人ンゴ私の顔が馬糞気でも見出さ
のゝ子つまへナアニそんなゐ事ぢやアないまんが子をぼぎ
去ることを考へて見ましたと なぐろ爰のやうで其
こたハまぢお茶さんが完ホ可笑らしい 暴論ぢ
お茶さんがつけく腎人と おしゃりまたヨ「矣ぢやア
全時ぢんハ可笑らしの事でもないことが今ぢやア
こんな者の利ね人野良ホなること顔を見ると笑相が

尽くは情しの事をあることでもお思ひのゝ子つて「イエお
茶さんがこんな立派な方ホお成んなさのを見
るホつけても 嫁私が婆アホなることと思ふと気
私ゝくなりまたハ「ナニこんゴ変を言ふものゴ
お茶さんゴア高麗がうゴものをまぢ化粧やうで
誰ホ見せくも十七八ゴと思ひやを「アモウ居る
まこんゴョこんな変を言ひく嬉しゴせくも此
徳ホやア分ホも出徳をハ乃ま せんョ イヤ私まやア

お出しゐ放心く居ましつぶお物が出来るこうも
知まうのヨ。サノ半さん一ぱいあつてお見のたいヨ〳〵
私しやアどゐ世話るのごうマア市亭主没ゐおちぶ
るせ〳〵つこヨやきうの義理の堅いるごエトこと
姉く盃の半り取りたりと知るべー〳〵大そう酔さ
家う私ハ是でおつもりとあやせう〳〵ホヽヽヽ酔さも
宜く出来とまざれうくぶお吃りでもるい癖ゐ〳〵ナニ
此通う顔が赤のやうゐるりやしこつこヨやホンニ子エ真

ごうりごヨこうこたたりたをたるゐおりどやア
実ゐ宜ハ子エ〳〵余程徳用向ゐ酒サハヽヽヽトきお師
匠きんこんゐ変を思ひちやア分板も海れ人沢ご
けきどもお茶と知う差対に酒うんごを呑んぐ
居ると昔のうを思ハ出しこれの関係ごらうと
実ゐ配んでも仕奉ようるて来るヨつこ〳〵そりやア
私ごうてあんゐごうサどんうゐるまきやうと思つても
お茶きんの顔を見ると思ハ出しこホンニ浮世の義理グ

遠坂のあくとり人名ハあるなぐら
俳ぶ名うら
実と すえろん

おくバとぎまらうくゝある変がなりまをヨ夫といふが
私が悪いのゞ年もいろいお茶たんみまを悪名を
つけさせさのごろ怪恐しくお異うまたヨ「ナンノ
そんな訳がなりやをものうんな自分ら乃出うさ
変サ。ホンニ号の悪い時と言ハものハ荒海の関取も
私の兄ゑも仁木板のお取立で屋しきへ抱へに
なりし荒奈助真南反方隅いと名まで暫くハ買
うさが奈助さんハ伝板も分解れ死ま

為なるゝ兄ゑハ欠落をしゝく浪かあをぢサ私も
実ハ力が落し此頃ぢやア商賣ハ出る気もなん
ものなくうりやしと正真を言やア奈助さんと兄ゑ
とが男同士歯と歯を合しゝくお茶と私ハ此以後
ものひハ口もきうをせぬと言つてなるのを奈助さんが
死さうら宜と思つて為うやつて遊びハ来る芝海
れ人沢ごとハおものかけまどもツイ未練な気が出てるう
やせんうら伝率私の心ハ思ひ切りの出来るやうに

お茶のにうら矣見でも言ひてお呉うまえ
とうやア男の顔づくと申ぐ時あやアお茶と
私ハ物も言ひ甘きのとお言ひ出もひつてこらうけまども
程もぎうまでそんなハ男つてお在でもひうまでまい
八子私も今ぢやア他ハ煩りと言ちやアみーお茶さん
でも時く拝びハ来てお呉うまえ言やアお細ふつて
うりまハ甘んヨお茶さんハ私ハ言ろ関係等の
顔ハ端付ハまるまえうまえあやアハ公易く顔

毋しづくのお突合をまるだりハ買ひじやアひうまえ
それ実ハ此方地へ来ちやア昔の情曲をおつて居るものハ
ひうまえぜハ只此方ハ左の右のと言ふまえ申うハ
気をつけくまえ居りやア買ひとおあるたちヨト他の
折しも門口へ来うる方地の若者「ヤイ吉やイ大分
今日ハ衣服がきまつてさま」「當り茶よ時分どきあやア
女が為遊つて異らア」「コウ空言ア吹くまえ」「ナニ
空言ア申うハ此方も池の端の茶屋ぐ宣九郎を

ゐるから一晩ゐ晴女が三個出来ア　×ヘンあひねん
気遠ざア　▲そりやア鯖うと頼業板のお爰ぜ
近て　お粗言ぐ　ゐると言うて寳の師匠が頼まるく
仕くぢやア　ねんう　▲ナニ頼業板ハ隠居しく今ぢや
るき代板の爰ぜア　▲宜く言業論をある男ぢや
ねんうゐかぢもおんなじ爰ぜョ　×ハ男も粗言うう
一幕やうしく推尊を遣ハ世て参りてんうのぢ
▲所が男ハうう　ねんトヨ　×ホイそりゃ大きくおりぢ

それも性とうア衣裳　著籠でもうゐて仕がいひ男ア
▲コウ室言ぜ寳ハぢと這入らねんうョ　×三味線の寳ぢ
ゐねんうう留守ぢやアなるめんう　▲ナニ寳ア稽古を仕
寳うとのぢアな変ども居ねんう覗いく見ねん　▲外う
覗いゐて中仕切の障子が締うて居るうう奥ハ見へ
ねんア　×ハなぐう変ぢが関へるぜ　▲遠へねんあるも男と
ゐ一ぜゐて居るやうぢ　▲コウ気ふうるうを言ふぢその
男ハ何処の野郎ぢ　▲マア待ねんト言ひなぐら内の板

子を窺ひて ▲〳〵半次の野郎の奏ぐ那様郎も余程師匠めやア晩飯をうつて居ると見えるヨ ×〳〵コウ山男等が世話をあたゝ蔓く師匠を那奴等ふ来くいちやつゝきちやア土地ッ子の面ぐを見れば人中 ▲〳〵十二位の師匠式が為が敏うう出来て居るヨ ●〳〵ヘンお茶の方だうり半分出来く居るのう ×〳〵豆袋屋の看板も古ひ四角ごと言ひつゝ皆く内へ入ける

珍説千代碩四輯巻之上了

誠忠列傳句読講釈 珍説千代碩四輯巻之中

東京 爲永春水著

第廿一回

伝馬坂東三津代 （世三体式といふる嬢の門生るかの津多代ぐ 遊人あり更あり）

京伝の多仔細あて木場存と五あらひもも見るぐ〳〵嫌ふあ

構へ見ぬ中ぞとゝふ三津代 （豫金ふ湯女風呂とふものの

ちなつち清あ風呂場ぐ風呂あ。 ）

咸遠風呂ふうあれ要ひて酒刷かんして奥ぐるゝ家の

拵ふ美麗なる在原業の依怙ゞとも呼ぶべき
ものゝ方もあり又類系の由逸湯女風呂人実八重
姫をひしまれ姫女房尾ふ別れてこそ
とい丸方もあき麗統りと成秘録あい載る多り今は統
と仮用して拵且津多代が蜜柿を統べ一什贅こそ湯女と
又るものゝ風呂屋ふ抱へし女ゆて賓人の来まる毎ふ成いを
砂をとり拵ふまるせて無紙ひ逸ふい拵筆とをむる
りる津多代もちでゆゝを湯女ゆて拵が風呂の河拵と呼れ

金屋ふ〜びあり〜しが〜を風れ撲の関元と所元し荒波拵
の事ふ念りて屢別源を重ねる程ふ逸ふ拵と助が〜を
ふく風呂のをふ金と取らせ河拵が身を更ゆ〜
余る彩ふよふ宝と拵らせを活の元と糸こふ形〜も
その半色花雷と僅を〜ふか拵い猫巨燈ふ〜れて
物の本とゝて居る所へ十六七の艶筆髪が表の拵ふを
塗ふ明て門の撰ふをさ〜明き〜ヨヤ主燒さんこゝ二個
どふ関取ハ此方じゃアあの久ト言ゆ〜河拵い中仕切の

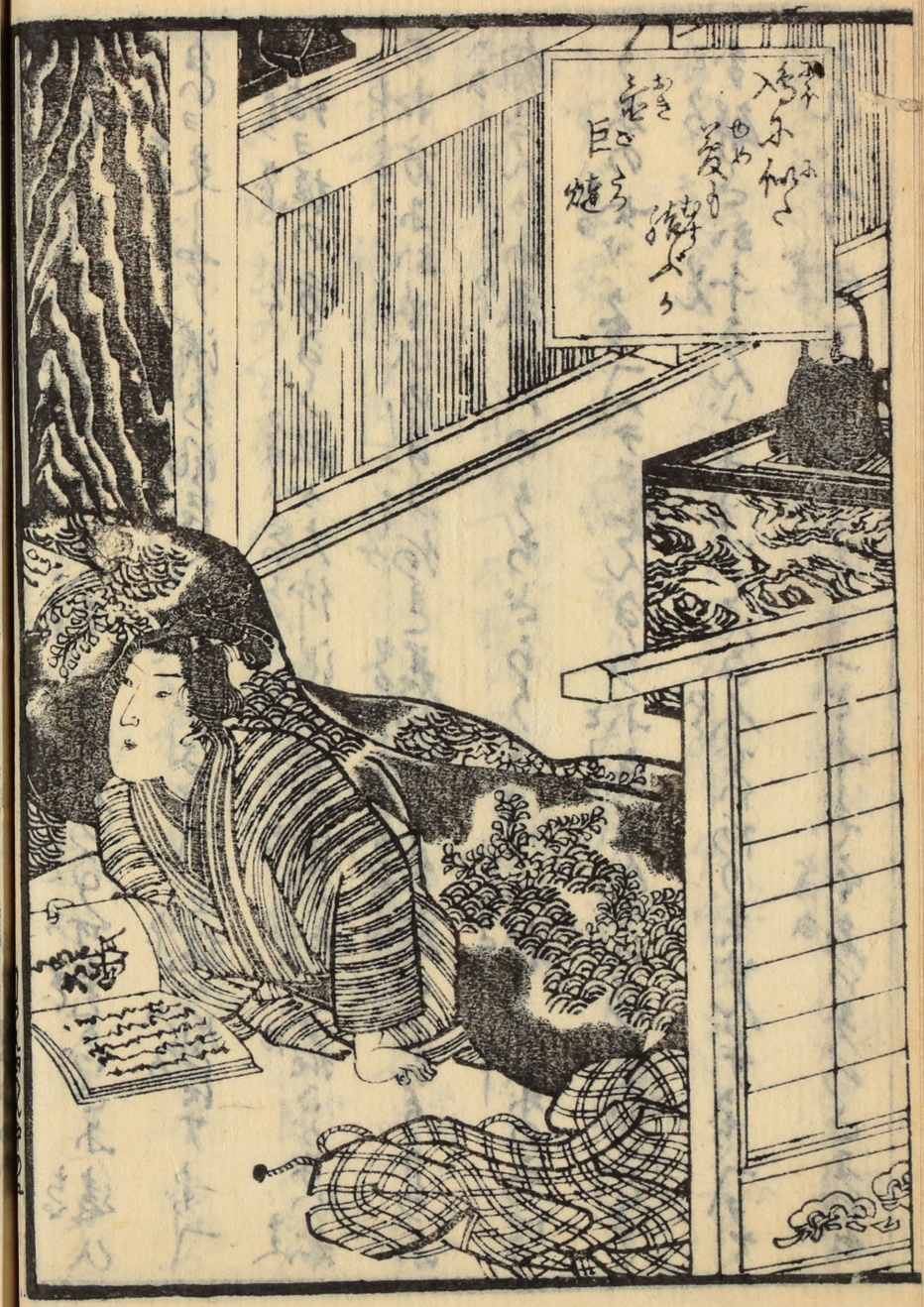
陸奥の蔭より新を出して完和第ひろ〳〵ヨヤ〳〵
実に いまだ来ないけれども今ふ来るる約束ごろ〳〵ア
よりみ文とも何ぞ急ぎ用でもあるのうくま〳〵ナアニ急用でも
ないが ヨ何ぞ年齢を合ろう君兄の所へ云つて来こうふ
つのく此方の実に ふも和徒げあるとゆつて紙てよとうと
ノサ〳〵ヨヤ文じゃア角力ぐんでまるのうまエま〳〵何でも実
に遠の遠車次第で初月の左歌と出たといつさうろ〳〵文じゃア
今ふ大うこ来るぞろうろ〳〵ア上つてお待ヨとして完ふ面
白い和と謂うこそ辱るうらサま〳〵何ぞ〳〵特板久ろ〳〵ア二度
所の正和サま〳〵和と言ちゃア帰らまるくなること文じゃア上つて
宜らうろうエろ〳〵おまこお茶ぐかよろのと紙ぐ悪いと言ふりの
ふサア宜ひうら来へ来て居燈へなうちぐ〳〵和と出徒寝ふ
宜ひ大ぐろうサま〳〵文じゃアあしふの先と暖めさせてお長ふさい
ヨト言ひつか抱しかつ合せふ居燈ふかうろ〳〵ア冷さい寝ふ
お茶のまい徒プ紙ぐエま〳〵ヨヤ陸プさく懐悪してお長ふさい
何ぐろう先ぐ先のまいやうふて居るうろ〳〵ア二宜ひうう

見と出して有りのうヨ寄う言ひても意いじゃ良うヨあれ
じゃア表賀書ふるごらうとゆヨト言ひて窓より見て
の服のそうえて うう〳〵ヨや〳〵 言ふうまの寄うみのが嫁
出して書とヨま〳〵丈よやア帰るノが出来ゆ〳〵あると大変ど
ヨエのぢ〳〵アレサそんなよ書ガ嫁ろて婚ごるとが有るうのうる
今でもか結でも貧て逝るハまま〳〵丈ハ無うとよの先が潔と
人間らしくゆうとをして表い何の程ごどヨエうち〳〵女清
玄サトちひなご〳〵四五冊ありしおと揃へて居焼楊のとふ何げる

ま〳〵ヨヤ此変居いたしーうとうとうガ何る寄うごヨうぢ〳〵ア玄年の表紙
言ふーて大そう書てさハ子ゆうま実丸達と関連でお家も私
も祝てこじゃア色いうま〳〵寄う〳〵丈ちう廊の様とえふ
まいぺうろけヨエうぢ〳〵何の時分まぢいお家もまぢれうちう
新さんで奥女元や離婚〳〵私ガ可ずうて稽こなるとのふと
恥う〳〵がいてだうりお主だつけが一年のるで今年ハ家う
らんな独の宜ひ更人ふおうりごヨ大うと俗ぞふ連ちうまて
ぢ〳〵女帝実ふもお出ごらうヨまま〳〵ヨ。イエうぢ〳〵アチそんなふ

踊さるいでも宮ひゞ子表ふ幾度ごうか出ざう始う
云りてお笑せとゝくべサまゝ丈じやり後方げるいう〳〵言ひ
ますゞ子弟ちゝ君ノ君ごヨる十二弟ふのの子丈ごう〳〵
踊さぎふ云ふのごヨまゝふ変いたゞと一段後まゝこヨるゝゝヲヤ
そりゝア何処の国で何とゝの娼女とお買ひのごゝ泥す堂
ゞゞく導きのと君ごうゝらう子工まゝイエひごい月ふ合ひ
まゝこうゝゝ嘆く何拙しゝてお私のやうなおおとりつける
女郎流ごなるものうゝそしゝて何まこ扇ごらう子まゝナア二

風呂サうゝヲヤ湯女さんゝ丈じやり私のゝ可愛ゞゞふ遠ひ
色ヨる丈じやり清水風呂くゝお出のごゝまゝイエ拙ゞ風呂サゝゝ
お治ヨ拙の方ゝ私ゞ大体湯女さん達い知つて振るゞゝお暮
のお方ふお呼びのゝ何と暮い和で英雄のごらうゝふ
解さんふ義さんのうちごらうゝまゝ十二私ゝ巣のこゝ口
う家の女サゝゝゝハテゝそんゝまらふ麻さんでいなるまいゝとゝ、
分解さお千さんごゝまゝそんゝ人でいなりません〳〵ヲヤ
それじゝア俗とおなびのごゝまゝどゝゝて色い矣ゝとふ云



いまません〳〵アレモウ考えつて人ノウ言いたいと彩うやつて参さ
るのヨト言ひながら居炬の中へ出して居る樽次郎のそと
ちやうり掘るまへ私しやア結うやらまさら百年も経れ
さうなりのどうアレアアなんみる味いみとおそひごりのと
私のやうないじやア居らとるのヨ性と強しかぶさと彩るヨ
まへイヤモウ支い大塚ひサ〳〵そんまう素恋ふ去るのごョまへ
何私も絵者がるいうもひ切ッて言つて仕舞ふが子真
湯女の名い掘の風呂のか掘とりふ恋ふ美しい紙のいひ女さ
う〳〵の考ひで一晩仕つて考さ処がその女まい色流ふ男が
居るのど私のやうな考い家ふるいと云つて九でやうつけ
らまてひどい目ふ合さ義と作歌えさとふ出しサ〳〵アレモウ
人ふ云へ考と探せ〳〵色て義ふしてお仕舞ごョ居らーいト
言ひながら〳〵今まで掘つて居るまえ次郎のふとカと入て掘ア
去るまへアレサ家うあやまうさうら恐恐してお異るさい
勢う言つてもひどい力ど子エ指の先まで去びまるやうごョ
〳〵ヲヤ力の所とそれちやアふ気がきるハよトひうちま

どうぞ所の仏様の正面と後ろ〳〵まへ〳〵宜敷と云
付如何とモレさうの義の幕ハ宜うございますと云
那清玄の屋敷へ私義ハ悪んで来て支うゝ濡ふるふと云
まへ〳〵私しやア清玄どのゝ云ひ付義ふでも宜ひうゝの云
ふと云つて居るけまどゝも義ふも云ふ様のうゝ云ふ云ひ
こいつんまり果敢ない位ど子上「ヲヤお前ハ何んざアそんな
可愛らしいお前様どりのを方こふ娘人ゲ多ゝ有りまして
お聞りどらうと云ふヨ私ハそれで実れうるくゝホンニ清玄の

やうな寧尼ふでもなつてらゝ云ひ切ゲ宜うらうゝと云ふ
んふるるゲ有りまをヨまへ〳〵何報しても幕ゲ清玄のやうな
尼ふるつゝ出家して方この私ハゲ屋敷へ来て毎歌
義の幕ゲなるふ遠ひるヨ苦うるゝ仕業ふやア松
若同士ゲ嬉敷嬉敷とたゞゲるやう何でも大変云ふ
うもふまをふうゝアア止こゝ急く方ゲ宜さそうゲ子上「
ヲヤ大概ゞヨそんなまで尼ふんでよるらまるめうゝまへ
そうてお前ふんざア何ふも尼ふるうとひとゝふ云ふもなさそう

お察ハまるゞ子又丈くも為一尼迄もおのうゞと私しゆア
直ふ死で仕舞ヨ多〳〵お前ゞ死ねば私もまゝ〳〵又多〳〵十二子
お前ゞ死さひとゆのい何様いふ仕ごう私ハい分解るい
といふるサまゝ私もまゝお前ゞ尼ふなり云ひとお言のゞ
何の仕ごうとうるいヨ多〳〵お前ゞ死さひとゆふ仔細を
お言ひごと私も尼ふなり云ひ仔細といふけまゝ
十二私のい迷も生〳〵居るうちゆどんるるゆ名ゆても親ひゞ様ゆ
いるいるゞうう〳〵死で生度ゆでも為うう今度の世ハい是

紙ゆ書ゆて居る一念でも親ひゞ離縁去ゆうとおもふ
多〳〵私も嬉うゞヨ多〳〵ゞ口まで出ても言ひ出す
ゞ出来ないのい何様いふ因果うと又尼迄でも
なうて仕舞さいのゞヨまゝゆア傍ゞ言ひ出
せないのゞ多〳〵何でも宜ひ度ゞサまゝゆゆゆ
ゆう分解ないよエサア何ごうお言ひとゆべヨウまん
なふ言ゆくもお言ひでないこ親うまるヨ多〳〵何様揚
ふなて仕舞ゆ喰ゆて遊るうまゝお前ゞ食

へけど私も彩うして食べくヨタ〳〵アレモウ怖らしい程
功名どノウト言へと氣窓ようなるとしく雪ゲ降り込
むを〳〵冷たい一すお絡ヨト言ひて縛ひあげる
と伸して窓の障子城佛切るおーも入れの蟹造
アてもやその暗くぞうわける

第廿二回

徳てその秋も末夜中比阿魔ゲ絡屋へ表より忍び
入る一個の傑者猛さいぐお魔とび抱きすくて

小声あて金りの〳〵ヨウ攘公何ものゝ人ん多物りする多い奴
表傍どゝるト言ひみぐ〳〵頼冠りをする多越を
取ツて上眼と巻つてお魔の顔をジロリト見る〳〵ヨヤ
俗ごと思ツてう風雲さんどよ今時分業因もオー
人の内へ這入る人なるオ私とつきて行れるやうと
言へ人のごまエ。アレサマア変とお教しとくをサヨウ
何拙しそうさあ〳〵アあ教されわく。コレマアアエ少メわくヨ
荒波拉之助の門弟ゲ風雲多之助と云いまちあア

鄙時三月の桜打棟がけ紙をはりとをく
はけうらしては流しても砂ごの菊菊どのとぞ上
ぶを逆てだかり　ゑるうらはもなりうとうしを流て張る
うち葉ひ今新い蓮波の関えいお表ふ喰ぶとて葉
井橋のき女門の二階で碎浪まて仕舞とうう逆か
はうち方へ来るを吉ひ入手　大書の隆る年の咲ふお表
物りで縣うて垂くのも可嬢とうどて念ってとうう
実れと縣ちうみて年紀紙とはけて表と墨紙

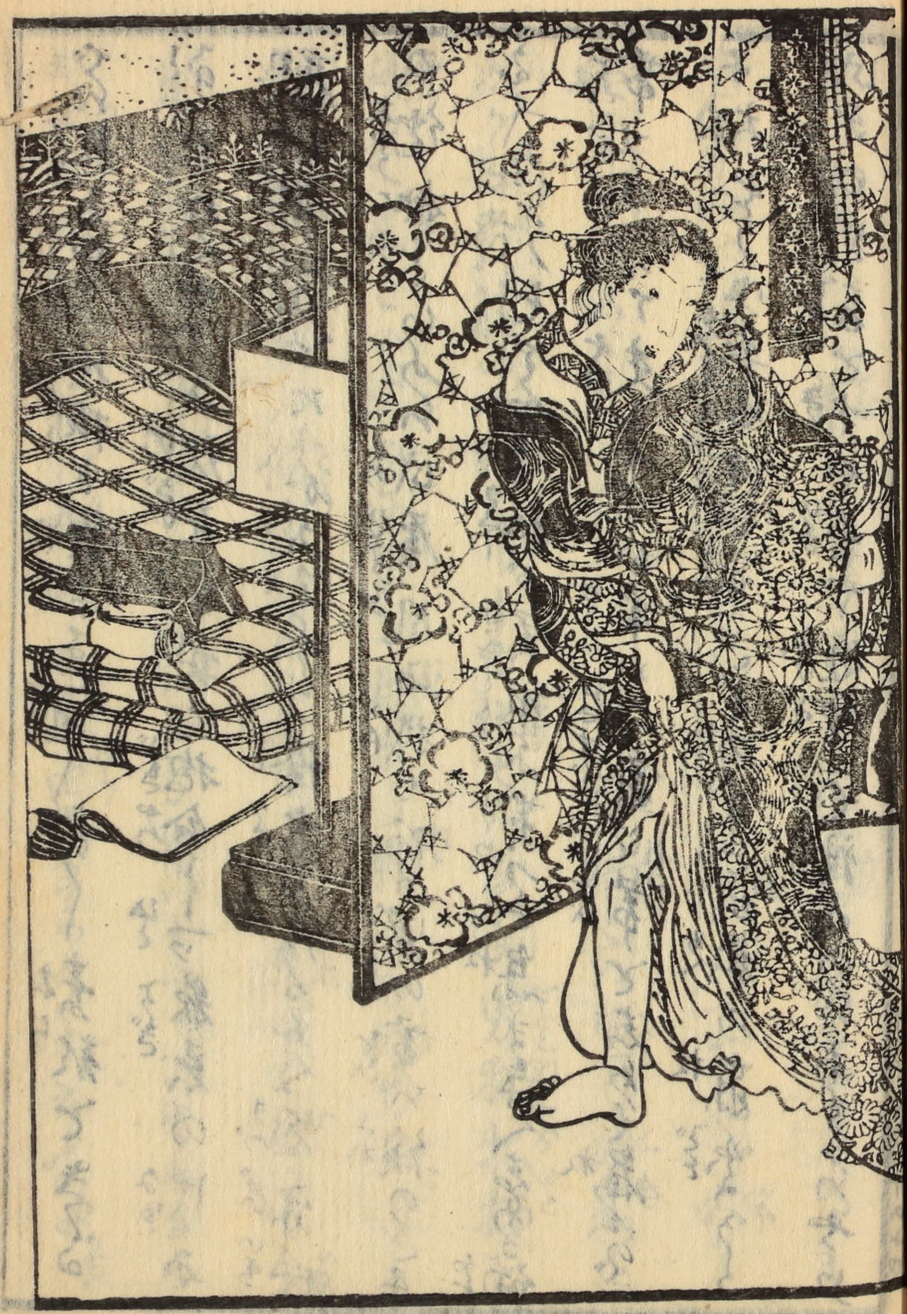
為人伝実男まんざら嬉くもなりやまい葉ひ爪の
版樊如も実れの門のおうとさんがせ八日癌きでをが
たいうとて教まれて社いてをすうう見逃んど
今歌の前尾他ふ人月も表兼もわく効う抱ちて
見まべえる社行祝も効うもまくらまわく先爪
うう効うやうう卜歳をうるを振りまるを「アレサ風
雲さん大概ふかヨりんまりちつ出くお表ひどと大
きの声をして氣とかせるく逆るヨ「コウつまくわく

をいとのご十にみのふ娘ゞあるゆへ
揚門のながりとやアわへゝ旦那ふ大きゐ癖とゐる
でもなるゆへゼそれ丈ゞも私ゆやア実れといふりのゞ
なるといふゆとゆ承知ゐるゞゝそんゐ結ゆるとゆ云ひ
ごりのを風ナニノ師匠の妻と情合とする男ゐい世間ふ
いこちもなりうちでなのんまり孫らしいゆでもわへノ中
者後もまと成ゆが師匠ふ別て破門とゆとアゆを
どコうぢかゆ和い結うりふ系ごう知ゝゐいゞ私きやア関

取の顔と咎付ふするゆうゐゆを知い何様お云ひても公系
るいョ形うりふうちふゆゆ人でも来るとお互ひふ痛くない
様とさぐられるのゆに情いうう何卒速く帰ッて
長といふゆすは風コウかお梶さん丈ゞやアお和い実元の新
と咎付ふするゆうゐゆいゐわへと言ふのごの通て何和
しゝそんゐ不実がゐるりのうゆは風ヘンなんまりに詳いゆ
と言ッて今ふ麁麁と出ゝきんゐョゐ風ヲヤ何さく風ヘ
更ひ加減ふ始ゞけるゐイ。コレゐるゆへと出ッて長るう

今はわが逃入りて来るとの知らせ袁ら逃げとみア
ありやア何処の殿様ぞ「三」「ア」とばかりでもなる
どらうナ今逃出すと知れ雷なりでちらりと面も見ぬ
雷とうとうその表も見と知つて長る男の面をと分れで
ひけ物きく〳〵第まで解てなんる着物を抱森を
しても見でもお前ハ実れを暗分ふちとのトやアれくうるる
極色洒なれ貞女さんどしうる名お前が形て出て善偽の自分ふ
ありせくまりやア今家のうちいなのもかも知つれへ新を隙しも

まるうもち方が横ならひ方も去地づく今ちとあらと実れ
へ見うく走ふ浸逃して密び美の金ものくうが長ト毛ア見
那しも故汲ふるうふやア何れもあるく義理ごうもを処が
狭ぐ嶽の言ぐさじやアわくぐ奥心ふ見びれ水ふでお前が鏡
うせく去やア深き赤い互ふなりうちごうら九い明ふある狭
どハるうち「そそやア長うお前ちんが実極まで深切ふ品
つそお長のい嫁しひけ見ども私きを美ふもあぐへのるい
見と引逃で嫁を若さなんでとちんるちひみとおいひ



鶴ばかり
ちりぬる
ふりもせぬ
松の雪

で私きやアイ何様も吾ごろ足ハ〳〵こう〳〵素新ときるもわれやアる状主系繋し抱合〳〵一ツ歌呂の中ハ
縛て吾さのをたしかふてら位方ゞ行るめく先第一
の徒枕といふ氏屋風ハ拭て行る男の著い視のごと
ゑ〳〵エ。アノヒヤアヒヤア私ゞ実有ふ黄つて緑まきく赤る紙
著サ風〳〵ハアヒヤア更ゞヒヤアかを赤い二筋ゞ著と赤めて縛るのご
ゑ大そう心要伝除いまゞごそのまとお赤の緑ゞ〳〵
氏分の皆言をゆや吾や逃却て性とのいあまらやり少

むり緑ま死著ろふ〳〵「アレサそんみ赤いなりやアるま
せんものとハ〳〵ゆゞまゞ〳〵たりと今〳〵そうやアゆと
猫ゞまなりさらうハホハ〳〵ゆる祇猫といい宜く知ま
赤うも資猫のつ死ちゞゆと化さくゆいの男猫乳猫と
縛ゞて赤とのゞらうう猫ふもゆて伝ふう
吾俤の返ゆいい何様ゆるのゞふ〳〵更ゞと伝いと今
ゑゞちちゆう新うとゆいまるりのふふハそんならゆ
著いい何様ゆれバ吾俤の自性ふらうとゆふのゞへ

伝様の形うのとこ
ろとりのこ中アないろ子工
ども今お殺とそんな結合
ねて四隅なお殺も修く出世
を処へ底が付ても笠いな
なるまいろ ヲット走グ山ろ
先刻も云て居る通り 紙合
お殺い女房といふ、ぞやア色
ひとまちどめる分の子
ア伝ふも攫まる伝いれくい子
ば方と向れへ子「ア」モウ
夜陸なるとねなぬで私
ふもるるしやアないろ工
うけちやア伝様も形うも
極る処と寝とうなサトム

ば方どうて角力とかまいまをアア素人ふるつてふ
ひとまちどめる分の子すす形うまで殺と居へて加
アやア伝ふも攫まる伝いれくい子殺者とこいずと
ば方と向れへ子「ア」モウお殺もまんがちる子工そんな
夜陸なるとねなぬで私ふ通く得伝とさせろう伝様
ふもるるしやアないろ工 通「ア」理でも西風でも形うり
うけちやア伝様も形うも嫌られ、マア表後い弘ふ して
極る処と寝とうなサトム云ひつ、又りや銭をかまを

アヤ　お前も学問の悪い子エ　私きやアねんねのいうみいうち
いどんみみとおるゝどうてもおれの自性おいなゝみいヨ
ハ　支じやア仏様でも不孝知らず　アア不孝知とゆふ沢
でいるいけまじもお前もたのんまり分解ない子エ　ハ
わへといお前のみゞ仏ゞうで出来わへやうで
蛇と生敷しふみとやうみみと云いまちやアきなぢう
探て徐方ゞわへやみ支ゝも看みらすつきうと思つて
呉るがいひ仕方もお前ふつゝさまて白痴ふされと後

金ふやア今歌の浦来と仏様かも見ゝ性そ関れおト
言ひて主と引き先ゝとんみマア新もみいみと言そ
お長じやア風る子エ　ハ　新の悪いもすきみじい性拙の第と
持つく性きやア迷も遊まるみいもゝわへ　ハ　アヤ性
しへお長ごと私の身ふやアかゞへのみいみふもしろもんみ
みうら実成ふ変まづく思いまるやうふみぷちやア変ふ
うまらない性ごい子お前も難きみみとみるみで消ねづく
みら仏様ふも又嘲いみるじやアみいう子エト実示知つて

風雲の龍と云やうし用元の愛敬千万無量の姿ひさへ
共きの一ツの用所のうちふ笹竜しやうふおもいも元至かう
ゝ風雲もおぢへぎ云ふ笑うと揺うち振し鬼化仏元
又家源ひ風〳〵ちんま〳〵氏身のいをと男ふとつの系ふ
まつとのゝ多〳〵とアやア何根ふもするけをどるもお
私のふゝ極云とがあつうう足ぎ笠ゝとう多元ないとホン
ノ書産のまぐさとで私とかくやうみまぐたのつちやア
私きやア弥でに情いのとは〳〵ハテキテ多私も疑う源へ

角が作ゝとかまつとてもか私ゝまう厚いわへと云ゝ
ゝう芝で沢ふどらうまどしう多の饗言ゝう指でも
饗でも氏首でも云ゝ宗ふ切て考ろハナ多〳〵アレ
熊うゝ多絞くお言ひでも男のゝと私の元ゝツイかい
とゝとゝも言ハもふいゝう私もとつくり云素をして
風コレナ至わへお梶ゝん云ふつも旅とおて至て物のへゝど
つまゝうわへやつゝりおんなゝど言素どアゝやうひう多ゝ
面作と云ゝとゝ変りだらして仕業ゝの多〳〵アレマア治て

お長の子ロ凡丁ども〻縛るうヨ〻ぐ丁丈ども今縛い凡丁
否な〻性くへト爭ふ折しの織ふ糸方ふ人言して
忽地入来る実有荒波二個ハ拘り光退れく互ふ
ふ結を就と新須更の辯ものごりけり

珍説千代碵四輯卷之中了

東京 爲永春水著

第廿三回

偖も陣場の風雲が強き波を迎えおのれが意を逆生
げ〻ふ恢んとさるが悪きも情しとおりへぐもその外も
奈何なる悪源あや遁ふ乞もれく〻まで所と深き水
何ゝで真実の拠をべ〻一蓮姿をたし〻ふ七まと又ら
ま〻うあへ言伏ケき此場の切流絶方もなく見へさる

扨しも只ひげをくゝ外面よりへ来る荒波枕を助
二個ゞそぶりと怪しあゞらお櫂と屁月ふ吃驚して
座の真中へどつかり居り 荒「ヤイ風雲係りやア先刻
お女門の二階で見そ森おろしふして遠所
へ何で来て居るのゞ侍い係アあるすと云て密夫
とひうぐのゞナ風「実取お前も鼻毛の伸と現在恵の
お櫂さんゞ男ぐるひとゐて居るゆと今歌をどろて
知てとのゝ 荒「ちいさい俗名知てゐ知人でも侍

拠とたゝうふ云ゐ人うちい先幼年もゐて居るゞ云ゝまと
うゐへを雑云結ういゝ係ゝひわり殺を風「コレナ
実取アア待ゐく走ゞゆ拠ゐゞ遠ひ中ヨ何の恨も言ひ
らゝゐくゆどゞ彩ういゝ破目ゆゝ後方ゞ引人何のかも
ゆゝひゞひ月白ゝ突ゐせく全体表のお櫂さんゞ
骨ゞゆゝ同髪ふゆる引ゝひこいゝ結男ゝ何の鳴神の
牙の本次所とゝゝ奴サ子供の癖ふ不いゝ〳〵表の
絶居くゐけ迷む拠ゆ何でも懐公とゆやゝいと遠風雲ゞ

白眼ごろ備とのゑのがおを初まつやの男とこぐ高麗
柄鏡うつと海くも色あるさるめ人花ねうとおい猿公も
外のうゑを見処と見つて風雲がお茶あい沙法ふ
一の思んで遠形く集と法ひたりふ使拠とうとうゑぐ
黄猿ふとうくり素足とのひ水次と見ひ切らせるう変も
かくれ人ゑ緑ゑ世界人だうと智れくうらふ水るく
おうて実衣の名の汚きれ人やうふるやうと師匠と見人
法実うく氏大雪と厳ひも世だ京坐と先刻と多く来く

肉の横ゑと霧へば業ゑ遠つ毛宝次奴と抱身やうひづ
くやらちゃくうものの熟ひ最津意ゑと云いふと見うく
来と氏身ゑ智ゑむりくくふ猿ぐうくくゑんごのと
那とお茶ゑ見ゑまぷくうゑ我慢いりやすりく
と実ふ楽して居り中と絵うるうちふゑ人ゑ の
猿公と本次しでお茶の喰と悪にうりぐあんまり猿ふ
居うゑうくうを絵門へ花処と半次ゑ裏うら紅虫
て何処く遠くう絵方紅とぎすを処で猿公とつら

めて　意見ふ時と強くしかと処く笑れか和ゞ来るすつて郭〳〵と自身ゞ疑ひもちやア　ホシニ却うり敬れうりでうるる処いありやせん　荒〳〵　鈴うまと係ゞぬうもあるア何ぞ時ゝ他拠でも風〳〵ハテ他拠のあいす言ひませうう他拠いあふト言ふうちふか橋いゑ速く東次郎の弟と九めて別原ゝと吏ゝも知らで風雲ゞ何うきうう〳〵寄ると荒波ゝもえて冷笑ひ　荒〳〵　屁に合つゑ係ゞ鍋まふもを他ふ仔細ゞ何らうト言ひてお橋ふうち財ひ　荒〳〵　ヤイ姉

女ゝ弟い自身ゞ新でえるとそ他うゝ病何〳〵ゝ死にて
むうり居るゞきんあり風雲ゞ言ふ変り東次郎と婚イ
居とう偏想もあゝび風雲と情曲のあるのう何ふうち郎
中ふ男ゝとう〳〵舟で踊ふむやらけと藤衣をゞこいづま
仔細ゞあゝて恨つゑサアその話とうちのけて自身ゞ和ゞ
言う〳〵仕舞へ　荒〳〵　あゝ和ふんの疑ひいさう〳〵　左理
ゝい名ひませんゞ宜く推量てもおえあゝい幸もいう
ないまさんと私ゞなんゞあんゞうゝそんあゝゞある

ものうる私ゞ独りで寝くゝ居る処へ風雲さんゞが晩の
百ふう案内もなく這入てくゝ来てモウ程なく死だつ
うり聞りきつて居る気味、お茶さんゞが来てお長の心
先その雅い通まてうり風雲さんゞがのんなこゝ必ひもつゝ
ない言うけとして自分の智と罪もない人ふ為さくる
強うるを工私きやゞ支でなくつてさく彩ういふ報答とゐて
居る処とお茶さんふ云らまるさぶりも消へた孤孤し
いのふ第一まづくでも必いまると俗令記でも記きまと

ないうゝお茶さんの腕ゆちゝあり私も分情のあるやうふ
伏こつけてお長みたいゝ「お茶がいくら肚面ぐ居
ても奴在抱まて寝て居くとのとひ風雲が見て居とヨ
「アレお茶こそたつと今まで私ふ情合ふちまの
なんのと無理だつうりとお言ひの癖ふ今実成の義
出て分の言伏おきつくく私きやゞ義ふもあゞ人のふ
さんな強嫌と解られちやゞ寔ふ何も遂成ぐヨ
「コレサ分ア為とおつてお茶ふ言うえい言ってけまぐも

うちこまり
ひや
冷まし
上
おかるとうり

能話らしいるうんぞい雲気ふ如ごとも わくヨ 「
アレマア あんな あらぐ〜しい 風 「あらぐ〜しいこいお茶のみご
ヨ 「イヒ エお茶が今までの形紙 風 「ナニお茶ごと言ひつのる
水掛論ふ果しなきこと荒波のいとりのけ 「てぺらくと
量しい 役ふ ものを わく長論 利 何方の言ふのも分解
わくが 風 雲 作 ものうさん くさいを 風 「コレサ言れお茶もてア
何のとゝぶけて言ひうさる物の毛の先で突と紙も墨
気のわく私ごヨ 悩ぐ〜何ぬく出ぐもひつあひ〜さいつけて

ゝんせやをて 蒲 「強うに参羅ふぬうしても強拠があると言
つて 紙て 重ふ きく まぐつきなぐ〜 文でも立派ふ 見ると
利うヨ 風 「ハテその強拠の男前も今までなつてとよ晩の
名ふ 猿公が 年度 隙 しと 出つサ 「ヲヤ 大概ふ言ひ
うけごヨ 風 「ナニ言ひうけトやアなりやせん 文もそこらを捜
しこら 何処ぞの 蔵 うら出ぬ ねやうふ。ナニを 前 がおらつ
て ものを 強拠 いいこちらの ものを 「ヲヤモウ 参ごヨ 風 雲
さんを 強拠 ふい 何を お言ひご 「ナニお茶 ふ みやや 言ひや

せん笑ひ一すト言ひながら傍の手燭を引とり
荒波と誘ひ合ひ裏と表の入口と先へ走る
廊下風「あんと笑板敷を伝ひ行かんと
荒「ヲヽ宜しく足元と言ふ丈に成て滑婦奴ト
言ひいかに拵の襟ぐりを抓んで勝へ引つけ
ヤイ婢女你ら荒波と白痴ふ為やつ
「アレマア治いてお呉なさい何様して私がお前さんと
荒「ヲヽ形うなつてもまだ寝ねるもの様に裏に

ふ男の逃こ雪の足跡表の口あい呼称とふ焼戸
押と張り抜が脱ちゝ引してあるゝい迷ぶ来ふ遠
ゆるゝまぶ寒う表風の差ぶいぶ拾ると出の
手紙荒波兄貴へ呼称ようとトやア紙が何時拾て
来ると同じまゝ拵ふギツクリ抓ち先刻の手紙
どび迷ト沢部が逃るとて廊風の部へ廻せ
ゆゝ足跡とちゝのり結とゝれて今更言解く
辞もゆゝくべい外のいとづゝ良吏とゆふ何ゝ

ども義理ある男の目と接めて涙ふそむけし顔を
適面なりしうるハ外と推しく言伏せるより他
あいと先後きりめて荒波ぶ働ふ色〻服元こふ
とまるどに一生懸命「笑面皮ぶ隠忍〻て
弱元思ふ捨うけうる自害の体とうるうもを迷
そのとてとうめて荒〻言伏るるの自害ふいまぶ〻
うつと家初のるを泥棒ぶ出ぶい何処までもほ仕せて
言ひこうるる宜くも此外そばのるく〻と白痴ふ為ふと

かぶとる金通類ハ狂女ひとり殺しとのおやア脇ぶ愈
わく騒所とも捕めくて手をとのそほふする姿う
されうら狂女ぶ方も哀れ乱雲
と遠狂ぶ動うるせうふ縛りあげろ〻指尻の下より
ヨツトうる知と早ふ動い自己ぶ意の恨ぶる遠恨も
含む脇金ぶ法入るお提を引抜せば膝の下より
忽地ふ鬱ふかくせ〻男筆の出るとを遠く引出し
凡「そうやこと筆も表ふ居と知ぶ脇ぶ他脇ぶ出ちや

ア連を遣まるるの出来れば人見といふのも分らぬ出
精から腹を怒るもあるやくきり〳〵腹をきまりなせ
ト言ふも荒けるのくるとと捻あげ伴の帯あてぐるぐ
巻き遣うちふ荒波の傷の視を引寄せて伺やう
さら〳〵書きてあ荒「風雲を巻い大蛇なぐ山一面
と唱ふ泡ふ波しとまいとと巻いその上波へ飛りくと
言ふ泡くむまとび奥ぢく「そりやア山分が結ぶ人を
ア吾と言ふせば連て来るがならんの事あら事次
と殺しとしに美くしい猿公とゝび「工「ナニサ わすけ
人ふも飛うまちやア 絵方がれくと言ふるサ「荒
天空話と言つゞと泣れくう「ヲ〳〵合点と風雲の
からげる屋ふ帆と捻〳〵その花も甲斐ふ雪の
歌尾と乱れける

第廿四回

遠所も為ふ人嫌会の整花の去地と小木尾人家
なるれし松原ふ繰む二個の大彩鑿「荒波「コレ鳴神

伊方接れ人遠荒波の西像へ流とゐるとまた次第
夢ゆゝ面と立やうと思ふく書と見れの〻紙の
風雲ふ然くと指せて考ひと返へ今ふ試れ東を接
接とゐやうと書て猫さうら抜を和をゞ食べ
の十分肩と指ふと考して考ふ波ゆて居と家ろ
るれば来次より先さ蔵る和をゞ抜を背のある紙
面ふいサア立れくう接れくう走しも食ゞ猪ひのう返義ゐ
ゞ上ト焦燥べ嗜作ちゞうふ西とふ人ゆゞ 荒波義迫

もどとアゞ少ゞ考ゞ和を母ゞ大うと和ゆんゞ知らうゞ出ゞ義
あの表次第ふ食考ゞうと言ひを夢ゆたれと猫
足ゞ言ふうあの那次第の外のうあよ第一の変の
あうと紙あふ引書ても教へとうる来紙の傷近
異遠言を今度のあ指あの少ちゆうく来次第
の肩と指の背と指のとんの死姫のゞうれ人考義
でゆれくゞとも伊根ゆ東ゞとおゆーの人波されれ人
の今の伊細ふふ人ゞれゞ男の立へ自俺の死屋い兎も

角もとゝ〳〵和尚と嘲笑ふるとのを知りつゝ彼の
文をも宜いと思ひちやつ色わく是も時節とおきさら
ぬ男を捨てゝ出さうらいは分と主人の爲に新身
と寄りうと和尚の後の愈るやうに何れとも揃まふ
ゝ長うを驚りあやつ主人と言ひたるけ
く言ひやと荒「イヤ驚くらいまゝ祈されまし和尚ゞ下
ゝ出さるゝぞツイを辯ふ安せられてゐりしはゞ
勤矣まるうゝ又驚りまを性うゞゝも形見とも習れ

ゝ

ら也は分ゞ狂歌とまるうもあまし次と何知へう歳一年
驚て長屋の祝と延も係ゞ役価でなりうゞるそんを歳
ゝでしくやうゝ此荒波ゞとちやうイ「あゝ主ゝも
何合わへさりゝいうゝと言ありのゞゞ先刻の主紙とうる
ゝを絵書沢と言ゞ吹せゞ泣てゝうゝ仔細ものう
らを作ゝ言ゝ問信うう言紙あきゝ和ゝすゝと
ヤレヤア待ゝと止ゝも驚らゞ息あるうちい言ゝまゝと
言ゝのゞ文と分解とうう經紙と主ちやりまゝわゝと

戸和の中へ押込でおろしと縋の金縋い義を志ろう
拾〳〵張目べ僅五尺の戸和のわくに一すでも
逃やうとしても逃られわく式分と敵しとそう多だ和
を曲がるう程ど時代辞をと言〳〵出て来を脇
目今目まで人中で男とぶべきと言称ぶ私の義で
も合さわくをと合せるく今がもどめて見といのも
色やうとと祝又の言葉が童い放サア行の根ありも
なんなかわまんとまつと朝さいなる和をの新と来れ

荒波れむしとをと合せ葉理をを求め〳〵言称が前さ〳〵
伸し見張のありさを分と寄付られ荒波を今
更吹あも吹きを場合然しく思ぶ本志のぶを女男
の意地と変ありを荒〳〵者を力士の実取のと人並
ら〳〵言言てもまさろの時い式変り更でも男と
言いまろう張合のわく腰抜とれを宜敵いちがを
わく男と言〳〵一応い式次と要ひを変りも志さう
宮ろしら多い係あい様ろ式才が揚を本次所を

白雪
赤心
最白
素赤

引ぎり卿へ板と愈る之時彼是咄言々ト言ひつ
帯とゆりさげ〳〵端折る裾と裾倶ふ結んとすると
引とめ「荒波余こい所分ない舎弟と渡さそひ
ゆら七重の袴と八重ふ打りかふそ手とかいせる繻
まぬりのい室狩の景とそ理こ二筋繻ふ多とから
まれと喰作ゞ物の中とも抵量して なりふくからうゞ
弾箏為や手繋りあやア 弟ゞ多い物抵でも和重ゞ
伝ふまりせるれ多ふ兵〳〵ぬ縷抵でも古儀で驚ことの

舟紐まんざら新出のわくでもあるめく兵ひの俗ふかつて
兵ア多ま更で和重の男多ま比多も釈への孝ゞとの
荒波ゞやアわくコレ実有是ま也言ふらねんして
次ゞ命い比多ふ兵りやれる荒「イヤ多〳〵わくふ形知ゞ
にうら出くゞ卿ふ多ゞ五分やも引うめゞ比多ゞ性ふて
邪ケゞ〳〵ひろぐゞさいゞ係ふら先く比世のいふ多と「
々無う言ア俗方ゞわくゞ迎も食い捨りのと先性実先
て寿ふらい係もいろふ死出の乙連と途の川の渕

端とゐるゝト履ゐゲ結と流ろく潺潺り月舟流して
掛寄まゞ遠方い看て冷笑ひ荒「性根のなきもつと
保ゞ力ゞ荒波ゞ五端あい「ゑうためい今月家保
ら抜きやゝ荒「マア保ゝらト覗ひ今ゐる互ひの牙
搖く脇ふ形うとゝゝ人ゐる形ーもさレ結て須更と声
みて俵の下僕ふ挑灯持ゐ世ふ義と出る一個の武士冠
ヨー紙巾と取退るを遠方の二個ハ呑殺ゝて荒「つのふ
ゝ知ゝぬお武家方ゞ何方あゐて俺ゞ何方と呼り問

へべうち鎖き武士「不審ゝ思ひ利頼義の逆
臣あて波井根長朱と呼ぶを老人新義拝奥の
帝橋ゞ隠ゞ長の横上あゝ拝ゝゝ人ゝ二個の笑ゝ今
来ゞうゝ宿ゐをゝまゞ何ゐ仕細ゐ赤ら双と問双
命とゝけゝの爭ひゐゐゝ人ゝ人ゝ人ゝ衣の
箸ひ方鳴祈荒波何方の磐ふ蹴ゐあゐても東那
の花と笑ふ程ゐ分不者ゐれども拉志も武士刀平
うけて遠湯の出へ姑且飲けて黄ひゝとト言へまて

二個へ與さるゝ顔ゐ怒然て去だ〳〵蹌踉しぶそのゆゐ
嗚呼い容形と正してひざゐづき「ゆひげ為へを
お辭るゐ扶撲の大〳〵喧嘩と抱ありさうゐ仕式案
方の出見仕ゐ由昇ら是て遠場を九くかさゐん
とゝ冥加ゐ余りしゐ多ゐら引ゐひうれゐ男のを
入まうのゐゝ近比失れゐれども只仕ゐ仕ゐ稼と
遠方ゐ言へゐ彼方ゐ参り「迚も男の捨ら〳〵荒波
彼令彼方の作ゐ由次ゐ貴を見ゐうちい家ゐ留ゐ

ゐ義世間の所元何振ゐ海ゐ出ゐ海ゐ出ゐ又振ゐる
と振振ゐ「二個ゐ言分ゐ理ゐ極ゐいへ式ゐ世ゐひ
ゐ出〳〵ツイ手ゐ作ゐ引ゐうれゐ出ゐ出ゐ出ゐ後
ゐゐゐ由次ゐ貴を俺ゐ仕ゐ〳〵海〳〵ゐ出ゐ「
イヤモシ丈ゐい私ゐ「ハテ何ゐ身ゐ獨ゐ月襟を
知らせ〳〵遠方ゐ對ひ「荒波是ゐ留ゐ留ゐと言ゐ
き〳〵須臾ゐ按ゐ「何ゐ容ゐ何ゐ〳〵ゐ式
家根ゐ手ゐ稼ゐ事ゐ人ゐと情ゐ仕ゐ

あけまことに力ふ撫でと云ひ給へと涙のお顔を洗ひ申されまい
ちんあらいよ〳〵事次第を聞て涙をふき申るいろ〳〵
無らべ万事示ふまうせと〳〵蔦〳〵ハテ口惜ふ及びやせん
二言といふもの男のたまふ銀〳〵と変ぜて分申安堵
先はしら多ハト言ひ分〳〵傍ふ扨〳〵ト奴ふ対し銀〳〵
事次第挑灯をとく〳〵ト言ひまして奴ハ元治新ふるイト
言〳〵さ〳〵出ると挑灯銀を糸をとる撫付ふグッとも
言ひまして奴ぶ細首水ゆれまるに吹義せば色を悪

りつえ四ん丁一ノ十七

ふと強く二個銀を糸縫ふ奴の血と撫ひあさるて
撫〳〵ありト奴の首と云あげて銀〳〵約束の首付〳〵い
是で言ふとぶるまいト言ひまして蔦波合点ゆえ〳〵蔦〳〵
約束〳〵ふ事次ぶ首変ふ引習ふ家僕と云ふ撫られ
一実形の心而為邪ト問うくせば銀〳〵不宮ふ形蔦り
なぶ〳〵男を驚く二個ぶ出の何方へ引もらくれぬを
知と云ふ〳〵菜ぶかゆ〳〵名と呼ぶト奴の事次罪ゆ報ゆ
ふ紀恭ふれど云名と付しぶ身の不運ふ変みぶ〳〵ゆ

多ふ樹くゝい寸次が船と寸次ふ負らせ山場を御ゝく
おさめる所多ふ見ぞ所らうが二個とも今青の多い多ふ
船けゝ山遺伝多船この船が一言吹くひト言ふとて
二個いさゝ俯向船底義うひてぞ居りける
畢竟鳴神荒波が寸ふいうて何ゝと言ふらん
斗い寸五輯の巻端ふ説明をとゝく明わらし

珠説千代磧四輯巻之下了